

# 『やってみよう！科学する心×いのち真ん中社会の保育実践』

## いのちある園庭づくりの実践

子育て支援ネットワークすずめ つばさ保育園

森谷 友子(モーリー)

### ○はじめに…

ここ近年自園も含めて保育園では、夏季は熱中症予防から、戸外あそびやプールの中止が増えている。温暖化が進むにあたり、このままでは子どもたちの未来はどうなっていくのだろう、これから夏は外に出られなくなってしまうのだろうかと一人で悶々としている時、『やってみよう！科学する心×いのち真ん中社会の保育実践』のゼミがある事を知り、“園での実践を積み重ねながらの往還型での取り組み”という所に魅力を感じて、学んだことを実践に繋げていきたいと思い、勇気をもって一步踏み出して参加することにした。

### ○ぐうたら村での学びを実践へ

自園の園庭は、校庭のグラウンドのような表面が乾燥した硬い砂で覆われ、植物が全く生えない園庭で水はけが悪い。コンクリート部分もあって照り返しが強く夏場は暑い。

私は、ぐうたら村での実践で体感した身近に植物やいのちが存在することの心地よさやワクワク感と、植物が存在することで日陰になり、地面も周りの熱を奪って涼しくなることを学び、この2つを実践に繋げたいと思った。

植物やいのちが育まれる環境で過ごすことの心地よさや面白さを、自園の園庭でも再現できないか。園に帰ってから、ぐうたら村での学びを職員へ報告。その後、園庭を使用している法人2園で『いのちある園庭づくりプロジェクト』を立ち上げ、大人を中心に取り組みを開始した。

### 実践① 土を盛る、植物を移植する



① 園庭の一部分に土を盛ると花壇の土からか何かが発芽。



③根付いて増えていく。



②雑草を移植。



気づき ～園庭にいのちが生まれ始める～



・身近な園庭に生き物のいのちが感じられるようになってきたことで、子どもも大人も一緒に“不思議さ”“面白さ”を感じている様子がみられてきた。

・園庭での子どもたちのエピソードを保護者や保育者間で共有できるように、掲示板を作成することで、職員間のコミュニケーションにも繋がっていった。

実践② バイオネストづくり



① まずは大人で「つくってみよう！」



②作ってみたが…



④子どもたちにも手伝ってもらったらどうか。



③翌日には子どもたちが壊してなくなっている。



気づき ～子どもたちと一緒に作る～

大人が作ると、作業途中の数日後には壊れている。その様子から、自分たちが手を加えたり、作る意図を知ることによって壊さなくなるのかと考え、子どもたちにも話して欲しいし、手伝ってもらおう。作業をどのクラスの子も見られる環境、時間帯に行い、年齢問わず「一緒にやりたい」という子と一緒に進める。“子どもたちと一緒に作る”を始めた。

すると、大人が愉しそうに手を動かしている姿を見て「何しているんだろう」「やってみたい」という気持ちになり、人から人へと連鎖していく様子が見られた。

行動や表情から、大人や大きい子への憧れの眼差しや、小さい子への思いやり、自分が参加しているという喜びや、自分でもできた！という充実感、満足感に満ち溢れているように感じられた。

自分が面白いと感じる体験をすることで初めて自分事として考えるようになり、人の気持ちや感情を理解しようとする心が働くのではないかと。自分、他者が大切な想いで作ったものは大切にし、壊さない。結果、出来上がったバイオネストは壊れることはなくなった。出来上がってしばらくすると、夕方にはコオロギの鳴き声が聞こえて虫たちの訪れを感じるようになる。しかし、冬になると生き物の姿はなくなり、置き物のようになくなっていった。



バイオネストの中に入りたい1、2歳児  
小さいクラス…バイオネスト＝遊び場



「ムシガネテルカラハイッタラダメダヨ」  
大きいクラス…バイオネスト＝虫のお家

年明け、ようやくバイオネスト横の木から落ち葉が増えてきた。落ち葉が増えると同時に小さいクラスの子どもたちが引き寄せられるように落ち葉に触れ始める。大人が踏むと真似して踏む、寝転ぶ、箒で掃いてみる。落ち葉を全身で感じると、その心地よさや面白さからか園庭に出るたび自分たちで出入りするようになっていく。アスファルトのようだった園庭が、バイオネスト付近はまるで森の中にいるよう。ここが遊び場の一つになっていった。

その様子を見ていた大きいクラスの子から「ムシノウチダカラ、ハイッチャダメダヨ」との声。

私は、その思いも大事にしたいが、1、2歳児の自分たちから中に入って遊んでいる姿も大事にしたい。中に入る事について“いいか”“ダメか”ではなく、子どもたちのバイオネスト＝『虫のお家』という概念を、その意味だけではない違った形でも捉えることはできないか…。

そこで、子どもたちとバイオネストのお話会を開くことにした。

バイオネストの落ち葉はこれからどうなっていくんだろう…。というテーマで話を進めると、「かぜがふいて落ち葉がなくなるじゃない?」「ダンゴムシが落ち葉を食べてなくなっていくんじゃないの?」「じゃあこの土はうんちってこと?」等、様々な声が聞こえてきた。対話することでまた違った視点でバイオネストを見ていくきっかけにもなったようであった。

落ち葉、虫についての話で盛り上がった様子、虫のお家への興味から、アートの日(親子ワークショップの日)に、虫が遊びに来られる場所、休息や産卵できるような『虫のお家』(バグホテル)を作ってみようとして子どもたちに提案。

ワークショップ当日まで、素材集めを開始。散歩時に自分たちで集める。職員や保護者へお知らせして家庭から集める。近隣の公園や小学校にも協力してもらって集める。子どもたち、保護者、地域の方々の協力で沢山の素材が集まった。

### 実践③ バグホテルづくり

ワークショップ当日、集まった自然物を使って親子でバグホテルづくり。

「どんぐりを入れたらリスがくるんだよ」と言って素材を選びながら作る子、「ゴキブリは嫌だけどヤモリがくるなら家に置いてもいいなー」と子どもに話しているお母さん。

完成した後は、どこに置いたら虫が来るか親子で考えながら設置。

「テントウムシがいる木にぶら下げたら来てくれるかな…」と考えていたり「家に持ち帰って置いてみようか」と話している親子もいた。



何入れたらいいかね?  
どんな虫がきてくれるかな



ここに置いたら虫のお家に入ってくれるかもしれないよ。



気づき ～ワークショップを終えて～

散歩で近隣の小学校の校庭に遊びに行くと、学校の畑にもバグホテルがあることに気づいた。何かもわからないが不思議な形をしたデザインの置き物に、何だろうとじっと見て、触ってみる一歳児の姿があった。穴の中から出入りする生き物はいないが塞がっている穴もあれば空いている穴もある。気になるようで穴に指を入れたり出したりしている。

その姿から園庭、校庭、地域の中でも、バイオネストやバグホテルが当たり前のように目にする日常風景になっていくことで、生き物が身近なものになっていくのではないかと感じた。



今回の実践では、近隣の公園代表の方にも素材集めで協力してもらい、それがきっかけとなって園のバイオネスト、バグホテルのワークショップの視察に来てくださった。そこから、公園でも同じ取り組みをしたいというお話をいただき、今後公園でのワークショップも開催する方向で進んでいるところである。親子で行うワークショップを通し、子どもと生き物のために作ったという体験から保育園、家庭、地域全体で子どもを育てていくという思いに繋がっていき、このような拡がりから保育園や街全体が豊かになっていくのではないかと考える。

○終わりに…

『いのち真ん中社会』をテーマに職員間で取り組んできた、自園でのいのちある園庭づくりと自分自身のぐうたら村での体験から、いのちある環境の中での心揺さぶられる体験が、身体と心の豊かさに繋がっていくということを実感。

草が生えてこなかった園庭に土を盛ることで園庭に草が生え、生き物の『いのちが宿った』という感動体験。そこから「なんだろう」の問いや不思議だな、面白いな、次はこうしてみようと目標なども芽生えていった。そこから得る学びの面白さは大人も子どもも一緒である。バイオネストを作ることで、“落ち葉の遊び場”となっていく様子から、豊かさとは物や量ではなく『いのちを感じる』ことなのではないか、と実践を通して感じる事ができた。どの生き物に共通する“いのち”。菌、土、虫、植物、動物、人間…循環されて成り立っていることを少しでも意識するだけで、心も社会も地球も豊かになっていくのかもしれない。

これが終わりではなく、これからがスタートである。春、バイオネストやバグホテルからどんな子どもたちの姿、物語が生まれるのかが楽しみである。